

平成 22 年 6 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007 ～ 2009  
 課題番号：19530727  
 研究課題名（和文）  
 接続期の子どもの発達を支えるアーティキュレーション・サポート・システム  
 研究課題名（英文）  
 A Study on a Support System for Articulation from Kindergartens to Elementary Schools  
 研究代表者  
 小泉 裕子 (KOIZUMI YUKO)  
 鎌倉女子大学・児童学部・教授  
 研究者番号：80310465

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、就学前教育から小学校へ移行する接続期に生じている、教師間にある段差（教育の目的、内容、方法の違いに生じている意識の段差）に注目し、その実態を明らかにすると共に、連携サポートシステム（A・S・S）のネットワークを構築し、連携を促進する2つのアクション・リサーチ（以下AR）を展開していった。小学校教師と幼稚園教師に対し面接調査を行い、グラウンド・ルールに基づく発話分析を行い、S.S.A.の介入によりそれぞれの教育観の違いを明らかにする中で、連携のモチベーションを高める効果や、教育実践の自己課題を促すことが出来た。本研究では、校種を超えた連携教育の推進には、現場実践を共感的に理解しサポート環境を作り上げるA・S・Sの存在が効果的であることを実証した。

## 研究成果の概要（英文）：

This study focuses on the gap of pre-school and school teacher's belief on the purpose, contents and approaches of education at the transition period between preschool and school ages. Our study revealed some facts related to their different attitudes, while we developed action researches by networking local teachers and the university staff, so that the network might function as a support system for articulation (A・S・S.), and enhance the articulation of the adjoining periods.

We interviewed teachers at both institutions and analyzed their dialogues for their "ground rules", and with the help of the A・S・S. staff, their different views of education were revealed. The team also assisted the teachers find themselves better motivated and guided them to seek solutions for their daily practice. This study supports the effect of the cooperative commitment of the A・S・S. to articulated linkage of education practice over kindergartens and primary schools.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：幼児教育、保育者養成学、

科研費の分科・細目：

キーワード：(1) 幼小連携 (2) アクション・リサーチ (3) A・S・S (アーティキュレーション・サポート・システム) (4) 保育GR (グラウンド・ルール) に基づいた発話分析 (5) 幼小教師間の意識の段差 (6) 園内教師間のコンセンサス (7) 授業観・保育観

## 1. 研究開始当初の背景

近年、「幼保小連携」は、極めて重要な教育課題となっている。平成 20 年度改定の幼稚園教育要領や保育所保育指針において、子どもの発達や教育の連続性を視野に入れた小学校との円滑な連携を促すよう告示していることから明らかである。

歴史を概観すると、幼保小連携の問題は近年特有の課題ではない。倉橋惣三の『幼稚園雑草』において小学校教育と幼児教育の関係性について、「子どもの発達から言っても、教育全体からしても離れているものではない」と言及されるほど、古くから取り扱われている課題である。

では、なぜ今また幼稚園教育要領及び保育所保育指針において喫緊の課題として取りあげられるのであろうか。平成 10 年の幼稚園教育要領改定で、幼児期の教育が小学校以降の教育の基盤となることを明示すると共に、子どもの発達の連続性に配慮した教育のあり方を示して依頼、教育施策、たとえば、平成 17 年の中教審答申及び平成 18 年の幼児教育振興アクションプログラムの提言等により、幼稚園や保育所では「幼保小連携推進」の必然性に迫られている。

このような教育改革の中で、小学校 1 年生の児童が、学校でのクラス単位の授業や集団生活に適応できないいわゆる「小 1 プロブレム」現象が社会問題となっている。その要因の一つに幼稚園や保育所の保育成果が上がっていないのではないか（自由保育の影響等）などと揶揄されることもおこってきた。

小学校教育との連続性を視野に入れた「幼保小連携」が、現実的な教育課題となっている一方で、推進の具体策は、平成 14 年以降全国で徐々に展開され始めている（文部科学省幼小連携に関する総合的調査研究等）。

平成 14 年以降、全国でも幼保小連携の実践研究が蓄積されているものの、学校や保育制度の違いから、実践レベルでの連携は難しいのが現状である。戸惑いながら課題への推進を余儀なくされているのではないだろうか。制度の垣根を越えて教育の連携を果たすためには、今までにない手法等で協働研究を実現して行かなくてはならないだろう。

## 2. 研究の目的

そこで本研究は、円滑なアーティキュレーションを妨げる要因のうち、「接続期教育」の内容や方法に生じている教師－保育者間の意識の段差問題をとりあげ、現場で生じている現象を明らかにすると共に、従来「幼保小連携推進」の阻害要因であった教育制度の枠

組みを乗り越えるべく新たな方略として、「子どもの学びと発達の連続性を育む」ための人的ネットワークを構成し、良好なネットワークが教員間の連携に及ぼす効果を検証し、教育環境を改善していくアクション・リサーチの実質的効果を明らかにしていく。

## 3. 研究の方法

本研究は、はじめに我が国の連携推進先行研究の分析を通し、その成果と問題点を明らかにしていった。次に、就学前教育と小学校教育のそれぞれの教師間にある意識の段差を確認するため、教育方法の特徴をグラウンド・ルールに基づく発話分析によりその違いを明らかにした。また、本研究のオリジナルな研究手法である A・S・S (Articulation Support System) によるアクション・リサーチを、発話記録とビデオ・リフレクションに介入しながら、幼保小連携推進に至るその効果を検証していった。

## 4. 研究成果

### (1) 先行研究の成果に関する分析

#### 1) 文部科学省指定研究の分析

文部科学省では上掲した幼保小連携の施策を展開する中で、平成 13 年度から、幼稚園から小学校への教育が滑らかに移行できるように、都道府県を実施主体とした「幼・小連携に関する総合的調査研究」を実施し、調査研究に取り組んでいる。平成 15 年度からは、厚生労働省と連携を図り保育所を調査研究機関に加え、新たに「就学前教育と小学校の連携に関する総合的調査研究」を実施している。

これら各指定地域では①幼稚園・保育所・小学校の連携を図った指導内容・指導方法の在り方、②幼児・児童それぞれの発達や教育・保育内容を踏まえた幼稚園・保育所・小学校の適切な異年齢交流の在り方、③幼稚園・保育所・小学校間の連携体制の構築、④教員免許や保育士資格の併有等による教員・保育士相互の理解推進及び連携の在り方、⑤幼稚園・小学校教員の免許併有の促進に関する大学等教員養成機関、教育委員会、教育機関等の連携の在り方等実践的な取組が報告されている。

平成 12 年当初は、幼稚園と小学校の学校制度上の違い、保育所との所管の違いから、連携研究を円滑に行う体制の整う国立大学教育学部附属幼・小の連携研究からスタートしており、平成 13 年以降も、公立幼小の研

究事例が中心となる傾向にあるが、我が国の私立幼稚園の比率からいえば、公私の連携研究が今後必要となるであろう。また保育所との連携も、平成15年以降スタートしている。幼小連携から「幼保小連携」へ、さらに「就学前教育と小学校の連携」という言い方が主流となってくる。

また、18年度以降の取り組みでは、再び国立大学附属の研究開発が採択されており、連携の範囲が、幼保小から幼小中あるいは幼から高までもつなげていく一貫教育の視点が顕著になっていることがわかった。

## 2) 『保育学研究』の動向

保育学研究を5年間さかのぼり「幼保小連携」に関する研究を検索した結果、林(2007)の「幼小の交流活動から見えてくるもの—幼小連携におけるもう一つの意味—」の1編であった。この研究は公立小学校に併設された公立幼稚園で、そこで展開された「小学生」と幼稚園児との自然発生的な交流から生まれた子ども同士の育ちから見えてくる「幼小連携」について検討した研究であった。

## 3) 保育学会における研究発表の動向

本研究では、平成20年の幼稚園教育要領・保育所保育指針の改定、告示、施行という保育現場の大きな変化により、幼稚園、保育所ともに小学校教育への滑らかな接続について示され特に注目される課題となった。

### ① 保育学会第61回大会の動向

備委員会の企画として「幼保小の連携」がシボジウムとして取り上げられ、いかに幼稚園教育要領および保育所保育指針の改定・告示によるこのトピックの注目度が高かったかが理解できる。このシボジウムで討議された主な内容は脳科学者、心理学者、幼稚園教員、小学校教員という幅広い視点から「幼保小の連携」の課題について検討が行われた。特に、幼稚園や保育所で展開されて「遊び」と小学校における「学び」についてその形態の違いが議論される中で「連続したカリキュラムの策定」の必要性について中心的に議論された。

### ② 保育学会第62回大会の動向

発表件数が61回大会の発表より10件以上増えて、ポスターと口頭発表を合わせても22件あった。口頭発表1件減少したが、ポスターが3件であったのが14件と4倍以上の発表数であった。これは、幼稚園教育要領および保育所保育指針の施行の年であるという点で、前年の告示の時点で新しい保育内容の方向性を模索した結果が発表されたものと考えられる。

また、テーマについて比較してみると保育内容に関する研究や、保育者や教師の「幼保小連携」に関する意識を調査する研究の数が増えていることが分かる。そして、これらの初歩的な内容に留まらず、カリキュラムや子

どもの記録用の資料様式が検討され、総合的サポートシステムについて検討されている。

## (2) 就学前教育と小学校教育のそれぞれの教師間にある意識の段差に関する調査研究

### 1) 先行研究より

本研究では、幼小連携の阻害要因として存在する、幼稚園と小学校の教師間にある「教育観(発達観, 援助観, 授業観, 保育内容観を含む)の段差」(中,1996)に注目した。これまでに、質問紙ではなく、実践活動を通して、幼稚園と小学校の教師の持つ教育観を直接的に反映する行動や発話を分析・比較した研究は報告されていない。そこで本研究では、分析の指標として、「グラウンド・ルール(集団(クラスなど)の参加者に対する、教師の教育観を直接的に反映するひと揃いの暗黙の理解(Edwards & Mercer,1987)以下GRと記す)」に着目し、実践活動における行動や発話を分析して、検討を行った。

### 2) 分析内容

#### ① 小学校教師の分析

小学校教師のデータは、2007年6月から2008年3月の間(全19回)、1年生1クラス、担任1名と児童28名を、朝の会から1時間目の授業(国語)を観察した。ビデオカメラで映像と音声を記録し、補助として筆者がフィールドノートに気付いたことや児童の様子など文字記録をとった。授業後、教師に対し、発話の意図や児童をどのように理解しているかに関してインタビューした。

#### ② 幼稚園教諭の分析

幼稚園教師のデータは、2008年4月から10月の間(全12回)、年長児クラスの担任1名と幼児48名の朝の登園から弁当の時間の前までを観察した。年長児の担任にはICレコーダーを首からつけてもらい、観察中の担任の発話を音声によって記録した。また、筆者がビデオカメラにより、担任の行動を追いながら、必要に応じて周囲の子どもたちの様子も映像と音声で記録した。観察後は担任に一日の保育を振り返り、子どもとの関わりやその意味について省察する場面を設定しインタビューを行った。

### 3) 分析手法

日本語版GR(松尾・丸野,2007)の3つの側面を基に、研究協力者である小学校のN先生が、各側面をさらに1年生の実態に合わせて3つの項目を作成し、計9項目のカテゴリーを設定した。授業過程における発話プロトコルに基づき、教師と対象児のGRの生成状況を数量的かつ質的に分析した。なお、幼稚園についても担任のM先生に小学校で用いるGRを基に計9項目のカテゴリーを設定してもらい、同様の分析を行った。

### 4) 分析の結果と考察

「GRの発話分析を通して幼稚園・小学校教師

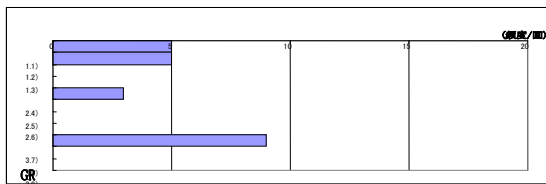
間にある教育観の段差」に関して、次のことが明らかになった。

まず、小学校における生活の基本となるのは「集団」であることが分かる。個々の子どもたちが持っている思いや行動を集団の中においてどのように具現化させるかに重点が置かれている。

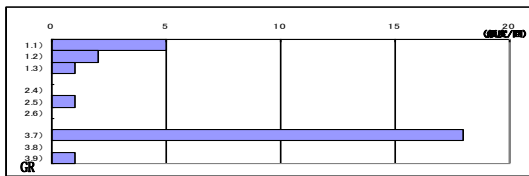
これに対し、幼稚園における生活の基本は、「個」の占める割合が大きいことが分かる。そこでは、個に重点をおきつつ、自分の思いを言葉にして伝え、友達の言葉を聞いて分かりあえる関係性を育んでいる。こうしたことから、教師はそれぞれの子どもの発達段階に即して、「個」を大切に育てる時期と「集団」としての責任や自覚を身につけていく時期とを適宜考慮しながら対応していることが分かった。

以上より、本研究では、これまで「段差」という曖昧に捉えられていた概念を、GRの発話分析を通して実証的に明らかにした点に意義があると考えます。

(朝の会における小学校教師のGRの 카테고리)



(朝の会における幼稚園教師のGRの 카테고리)



### (3) A・S・Sの介入によるARの効果に関する調査研究

#### 1) 幼稚園教諭Mの授業リフレクションにおけるAR効果

##### ①AR研究の必然性

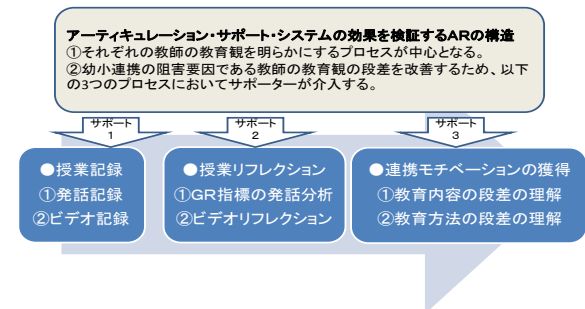
我々は、教師間の授業観・保育観を巡る実践研究の成果を整理した結果、質問紙調査や授業観察法の限界を越えた研究法が必要であると考え、アクション・リサーチを試みている(小泉他)。ARは、佐野(2000)の指摘する、「今まで優秀な教師といわれてきた人たちであっても、対応できない側面がある。ARはこれまでの経験では解決できない得体の知れない問題を抱えており、既成概念から抜け出し新たな試行が必要な時代にこそ有効な授業研究法」という文脈にもあるように、教師間にある教育観の違い(段差)に注目した実践研究を施行しながら、教育の相互理解を果たすべく教育環境の改善を図るための

研究手法といえる。

本研究では、「GRによる発話分析」を行い、教師の授業観・保育観を明らかにする過程で、振り返る際の人的サポートとしての研究者2人と大学院生1人を適用した。教師が自らの授業観・保育観を振り返る際に、もう一つの「振り返る協働者(A・S・S)」の存在が効果的であること、そしてそれぞれの教師が「教育観の段差を乗り越え幼小連携モチベーションを獲得」することに効果的であることを検証していった。

#### ②研究の方法

幼稚園教諭Mに幼稚園児の実態に合わせた計9項目のGRを設定(小泉らがサポート)し、GRの生成状況を数量的、質的に分析していった。また、ビデオ・リフレクションは発話における内観的意味を補助する有効な手法である。本研究では、GR発話分析の結果について、ビデオを見ながらサポーターと共に再考する独創的なリフレクションを行った。教師は自らの授業を見ながら、発話した意味と行為について、サポーターとの対話の中で振り返っている。サポーターは、幼小連携のモチベーションを高めるための協力者であり、対話の中には、幼小の教師達に互いの教育を意識した質問を誘導することもある。



#### ③明らかになったARの3つの効果

##### A) 幼稚園教育の特性を明らかにする効果

幼稚園教諭Mは、人的環境としての2人のA・S・S(研究者Kと大学院生S)との対話の中で、自らの教育方法をリフレクションしながら、幼稚園教育の特性も指摘していく。Table1に示したデータは、i~ivの「朝の集まりの会」の1場面、その保育について語る場面である。

発話プロトコルからは、幼稚園年少の担当者が子どもの行動にけじめをつけるとき、気持ちを切り替える手段として手遊びを使用する一般性のあることを意識していることがわかった。

そして、年長担任では意識的に手遊び使わないことを指摘し、「歌って場面を切り替え、集中して話を聴くような場を作っている」と語っている。最後に、Kが「幼稚園の先生の特徴ですかね?」と確認すると、M教諭は「そ

うですね」と答えている。この対話から、幼稚園教育には、一斉保育の場合、保育場面を切り替えるときや、子ども集中させて伝達する時は、年齢に応じた幼稚園教育の独特な指導法があることが意識化されていることが確認された。

#### B) 自らの教育(保育)を問い直す効果

一連の研究に参加したA・S・S(KとS)の効果については、3者対話の終盤において、自分の保育を問い直す場面となったことや、実践者でない人(第3者)の視点からの問いかけを通して、幼児教育を園外に説明する難しさを実感していることは興味深い。

また、言葉での援助法が幼稚園にとっては一部の援助法であり、保育者の身体性や環境構成などあらゆる形態で保育を行うことを認識しており、ここにおいても、幼稚園教育の特性を自覚している様子がうかがえた。

- i 教師が椅子に座り、対面して子どもが床に座る。
- ii 教師は全員が集まるまで子どもと一緒に待っている。
- iii 全員が集まるのを子どもと一緒に確認する。
- iv これから「今日の一日のこと」を子どもに伝える。

#### C) 連携モチベーション獲得の効果

連携モチベーションについては、発話より小学校などの教育方法や教育の重点への関心が高まりつつあることが確認できた。さらに、小学校側に幼稚園の教育を伝えて行く重要性を認識していることは、すでに、M教諭が連携への自己課題を明確にしているという点で連携モチベーションは高まったと言える。

#### 2) 幼稚園教諭Cの授業リフレクションにおけるARの効果

##### ①研究の手続き

本研究の被験者保育者Cは、教育歴22年の女性幼稚園教諭であり、3年前より地域や県内の幼小連携研修会に参加するなど、連携教育に対する興味・関心が高い実践者である。小連携研究の担当者として長年実践しており、「連携推進のモチベーション」は既に獲得している状況にある。しかし、実際の小学校との連携方法や内容に対する知識や方略に確信が持てず不安を抱えている現状にあった。昨年度の本研究成果に賛同し、C自身が当事者になりA・S・S介入による共同生成的アクション・リサーチを行うことに積極的に受容した被験者である。

##### C事例におけるARの手続き(21年5月-12月)

- ①21年度4月、幼小連携を見据えた保育GRの明確化
- ②保育場面(朝の会中心)の定期的ビデオ記録
- ③A・S・Sと共に「幼小連携」を見据えた保育リフレクション
- ④教育の内容・方法の違いを理解し、連携推進への自

#### ②研究結果

##### A) Cの「語り」からわかる保育GRの特徴

保育者版GRには、松尾・丸野(2007)の指標にない幼児教育のオリジナリティが存在すると考え、本年度の実践者に対し、「保育実践上の自身の方針」の作成を依頼した。それを保育GRと命名し、発話分析および保育リフレクションの際の客観的指標とした。

保育者Cはリフレクションをする際の「語り」の中で保育GRを次のように明らかにした。

<保育GRは個人のGRではなく、園全体のGRである。>

第1回リフレクション時(2009.5月)の園長の語りから、保育GRは個人のGRではなく、園全体のGRとして位置付いた指標であることがわかった。

<年長独自の発達を考慮し「遊び」「自覚」「グループ活動」の柱をもつ。>

保育者CのGRは第2回リフレクション時(2009.6月)に、自らの語りの中で明らかになった。(GR1)私の幼稚園の基本は自己有能感を育てることで、子供が自分の良いところを見つけていって自信を持つことを大事にしている。(GR2)集団の中で、縦の関係や友だちと関わる中で自分のあり方を感じていく、コミュニケーションの力が付くように育てたい。そして、年長独自の発達段階を鑑みて(GR3)「遊び」の柱、(GR4)「自覚」の柱、(GR5)「グループ活動」の柱に支えられて年長の活動を設けていると語り、園長の語る園全体の保育方針のもと、年長クラスの担任としてさらに3つの柱に細分化した保育GRを明示した。

##### B) 保育者Cの保育観の特徴

保育者Cの保育観を明らかにするため、朝の集いの保育場面におけるC1~C17までの対話プロトコルをGR指標に基づいて分類すると同時に、その意味層を再考し簡単な単語に置き換える作業を行い、カテゴリ分類も平行して行った。

「朝の集いの保育場面」に対する対話プロトコルデータを表のように、分類していくと背景にある保育観は次のように考察される。「保育者Cの保育GRは実践の根底に確実に根づいており、実践上の信念(belief)となっている。その信念は、一人一人の発達を理解しながら、長期的見通しをもって援助指導が実現されていく。」

##### C) 保育者Cの自己課題の特徴

2回目のリフレクション時に得られた対話プロトコルから、Cの自己課題を明らかにしていくと、i保育者は一人一人のドラマを客

観的に把握し視野を広げることが重要である。ii 幼児教育の特徴は、子どもの長期的発達観をもち、見通しを持った教育であり、幼児教育の重要性を小学校に伝えていく。という2つの課題が浮かび上がってきた。この結果から、リフレクションによって今まで自身が見えていない部分への気づきにふれ、第3者(A・S・S:ここでは園長)の介入を契機に、客観的に保育を振り返ることの意義を確認していることが判った。同時に、幼児教育の特徴を自覚しながら、小学校に伝えていく意義を自覚していることも確認できた。

GR	意味層	発話
GR1	自己有能感を育む保育	7, 11
GR2	社会性を育む保育	6
GR3	遊びの重要性を促す保育	8, 10
GR4	子ども自らの自覚を促す保育援助	5, 13, 15
GR5	グループ活動の重要性を促す保育	
他1	一人一人の発達状況に応じた保育援助	1, 12
他2	一年間をかけて成長発達を見守る保育	3, 4, 16
他3	学校に幼児教育の重要性を伝える意義	17

#### (4) おわりに

本研究は、良好な人的ネットワーク(A・S・S)が幼保小連携の実践に及ぼす効果を検証しながら教育環境を改善するアクション・リサーチを展開していった。平成19年から平成21年の3年間にわたる研究から、現場サイドから連携を進める視点には限界があることを改めて実感した。①小学校、幼稚園、保育所といった異校種間には制度上の段差が顕在化し、現実的な連携を実行しにくいこと。②教育内容や方法にはそれぞれ独自性があり、意味のある連携を果たすため教員間の相互理解が欠かせないが、日々の多忙な業務等の理由で交流機会が確保できないこと。③実践を円滑に行うための安定した教育観・教育力が欠かせないが、実践者の専門性に個人差が激しく事実上の交流が図れないこと、等である。A・S・Sは、実践者(調査される側)のエンパワーメントの視点をもつ「参加型世界観」を志向し、実践者の授業・保育を共感的に理解し十分なラポート環境を作り上げ、調和的なアクション・リサーチを主導してきたつもりである。今後も、良好な連携の実現に貢献しうる人的ネットワークの実現をめざし研究を進めていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 7件)

①小泉裕子・関川満美, 連携教育を意識した「就学前教育」についての一考察、日本保育

学会第61回大会, 2008年5月18日, 名古屋市立大学

②小泉裕子・富田久枝・田爪宏二, 「接続期の子どもの発達を支えるA・S・Sの研究—幼稚園教諭の授業リフレクションと幼小連携に対するモチベーション獲得におけるARの効果について」, 日本保育学会第62回大会, 2009年5月15日, 千葉大学

③小泉裕子・関川満美, 「グラウンド・ルールの発話分析によって見られる幼稚園・小学校教師間にある教育観の段差」, 日本保育学会第62回大会, 2009年5月15日, 千葉大学

④小泉裕子・富田久枝・松田広則・田爪宏二, 「幼保小連携推進のモチベーション獲得を目指すアクション・リサーチ」, 全国保育士養成協議会研究大会第48回大会, 2009年9月16日, 東北福祉大学

⑤小泉裕子・松田広則・遠藤隆二, 「一人一人の幼児・児童・生徒の学びと発達の連続性を支援する教師の連携」, 日本教育カウンセリング学会第7回研究発表大会, 2009年11月26日, 鎌倉女子大学

⑥小泉裕子・関川満美・田中君枝, 「接続期の子どもの発達を支えるアーティキュレーション・サポートシステムの研究2—幼小連携を視野に入れた保育リフレクションにおけるARの効果」, 日本保育学会第63回大会, 2010年5月22日, 松山東雲短期大学

⑦田爪宏二・小泉裕子, 「幼保小連携の推進に対する保育者の意識」, 日本保育学会第63回大会, 2010年5月22日, 松山東雲短期大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小泉 裕子 (KOIZUMI YUKO)  
鎌倉女子大学・児童学部・教授  
研究者番号: 80310465

##### (2) 研究分担者

内藤 知美 (NAITO TOMOMI)  
東京都市大学・人間発達科学部・教授  
研究者番号: 10308330

高垣 マユミ (TAKAGAKI MAYUMI)  
実践女子大学・教授  
研究者番号: 50350567

富田 久枝 (TOMITA HISAE)  
千葉大学・教授  
研究者番号: 90352658

鈴木 樹 (SUZUKI TATSUKI)  
鎌倉女子大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 00410027

松田 広則 (MATSUDA HIRONORI)  
鎌倉女子大学・児童学部・准教授  
研究者番号: 40352512

田爪 宏二 (TAZUME HIROTSUGU)  
鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授  
研究者番号: 20310865